



TITLE:

京大広報 No. 148

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 148. 京大広報 1977, 148: 702-705

ISSUE DATE:

1977-11-15

URL:

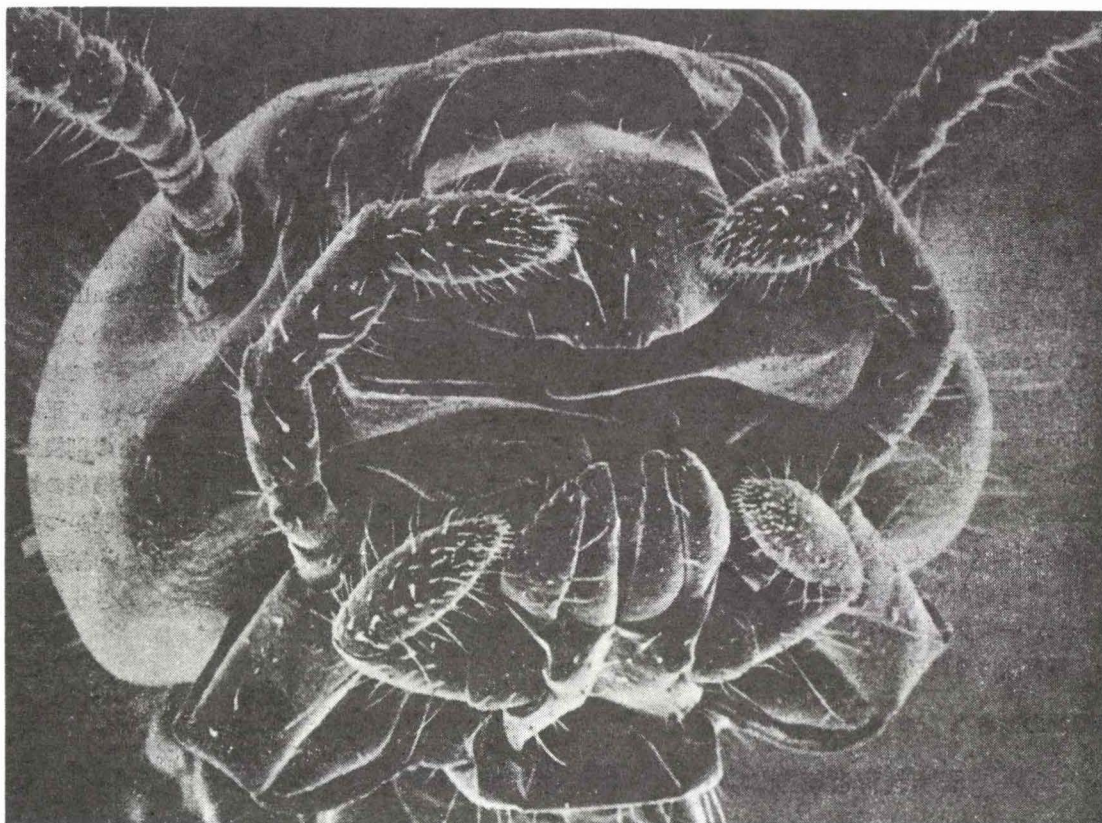
<http://hdl.handle.net/2433/209542>

RIGHT:

# 京大広報

No. 148

京都大学広報委員会



木材研究所で飼育しているイエシロアリ（職蟻）の走査型電子顕微鏡像 一関連記事3ページ〈紹介〉一

## 目 次

10月27日の事態について..... 2	桜田一郎名誉教授が文化勲章を受章..... 3
11月8日の事態について..... 2	〈紹 介〉
医学教育と解剖体	木材研究所..... 3
一第77回医学部解剖体祭によせて一..... 2	学術講演会の開催..... 4
原子エネルギー研究所長の交替,	日誌・訃報..... 4
農学部附属演習林長の交替..... 3	

## ＜大学の動き＞

## 10月27日の事態について

10月27日（木）午前10時、登学した総長が本部正面玄関から総長室へ向かおうとした際、附近にいた赤ヘルメット着用の数名を含む約30名の集団が総長の入室を妨害しようとして襲いかかり、総長が玄関付近で押し倒されるという事態が生じた。

このため、10時8分頃、総長の要請により出動した警官隊が学内に立ち入り、総長の入室を妨害しようとした集団を排除し、同10分頃総長は入室した。警官隊は、10時50分頃に学外へ引き上げた。

## 11月8日の事態について

11月8日（火）、午後1時30分から大学本部において評議会の開催が予定され、同26分総長がこの会議に出席するため本部構内に入構したところ、これを阻止しようとする集団約70名が本部正面玄関付近に座り込んでいた。

このため総長は、さる10月27日のような混乱が生ずるおそれがあると判断し、警官隊の出動を要請した。警官隊は1時30分頃学内に立ち入り、座り込んでいた集団を1時50分頃までに玄関外に排除した。

評議会は、1時42分総長の入室をまって開催された。2時前から本部時計台前で集会やデモが行なわれ、一部集団と警官隊とのもみ合いがあったが、警官隊は2時50分頃学外へ引き上げた。

## ＜部局の動き＞

## 医学教育と解剖体

—第77回医学部解剖体祭によせて—

近代医学の発展の跡を辿る時、人体を実際に剖検観察することが、宗教的あるいは感情的な圧迫によって、いかに困難であったかはヨーロッパはもちろん日本においても歴史が如実に物語っている。日本にオランダ医学が紹介され、Johann Adam Kulmus が1734年にアムステルダムにおいて、オランダ語で出版した著書 *Ontleedkundige Tafelen* を和訳し、さらに他の洋書の挿図も加え、杉田玄白が中心となって1774年に発刊された『解体新書』が日本の医学の近代化の暁のように

一般にいわれている。ところがそれより以前、1732年に京都在住の眼科医が2人の死刑囚の骨格を剖検し、1741年に論文を発表し、医学研究のために人体解剖が必須であることを強調している。また、1754年に山脇東洋らは、やはり京都において死刑囚の剖検に基づいて、従来の漢法医学によって提唱されていた五臓六腑説に多くの誤りのあることを指摘し、人体解剖による経験的実証法による研究の必要性を1759年発刊の『臓誌』に強調している。これに対し批判反対の声も高かった反面、必要性に対する賛同支持もようやく医師間に広まり始めた。このように『解体新書』発刊前、すでに日本人医師により、人体解剖の医学における重要性が提唱されていた事実は注目されるべきことである。

外国においては、11～12世紀にすでに剖検観察は行なわれ、1113年に中国の安徽の楊介が死刑囚の剖検に基づいて、かなり正確な人体解剖図譜を発表している。1543年に Andreas Vesalius の手による *Corporis humani fabrica* という標題の著作は彼の人体解剖に基づく重要な業績であり、医学の今日の発展に大いに貢献している。正常な人体の剖検所見に加え、病死したヒトの剖検または法医学的剖検は、人体の構造および機能の知識の充実に役立つのみならず、死因の究明かつ病気の成因の解明にも欠くことのできない経験であり、これらによって近代医学は更にめざましい進歩を遂げてきた。



第77回京都大学医学部解剖体祭は、10月20日に多数の参列者のもとに行なわれた。医学の進歩のために 献体された方々の霊（昨年までの 合記者 22,787体、本年度合記者425体）を弔い、御冥福を祈らせて頂くと共に、御遺体を以て死後に至るまで医学の発展進歩を通じて人類のために御貢献賜わった尊い御遺志に、心からの感謝を捧げさせて頂いた。亡き方々の御遺志を尊重され御同意下さった御遺族の方々にも、深く御礼の気持を披瀝させて頂く機会を与えられた。また、御遺体によって真の人体構造と病因を勉強させて頂いた多数の学生諸君が出席したことを特記したい。これはひとえに学生諸君が、いかに大切な経験を得、それに感謝の気持を表現し御冥福を祈らねばなら



ない気持に駆られて、各自の宗教・思想を超越して解剖体祭に出席した明らかな証拠である。教科書や図譜を見て暗記するのではなく、剖検という実際の経験によってのみ、真の人体解剖学、病理学、法医学は体得されるのである。

(医学部教授 星野一正)

### 原子エネルギー研究所長の交替

11月1日、西 朋太原子エネルギー研究所長の辞任に伴い、その後任として鈎 三郎原子エネルギー研究所教授(放射線応用工学研究部門担当)が任命された。任期は、昭和54年10月31日までである。

(原子エネルギー研究所)

### 農学部附属演習林長の交替

11月1日、佐々木功農学部附属演習林長の任期満了に伴い、その後任として寺崎康正農学部附属演習林教授が任命された。任期は、昭和53年4月1日までである。

(農学部附属演習林)

### 桜田一郎名誉教授が文化勲章を受章



桜田一郎名誉教授は昭和52年度文化勲章を授与され、さる11月3日伝達式が行なわれた。

同名誉教授は明治37年1月1日宮城県に生れた。大正15年3月、京都帝国大学工学部工業化学科を卒業後、同学部に勤務、昭和9年

工学部助教授、同10年教授になり、工業化学教室第4講座を担当、同16年繊維化学教室(現在の高分子化学教室)の新設に伴い同教室第一講座を担当し、同42年退官、京都大学名誉教授となり今日に至っている。この間京都大学化学研究所教授を併任、また同40年から2年にわたり工学部長をつとめた。

同名誉教授の研究は繊維素誘導体に始まり、高分子溶液、高分子化合物のX線解析、高重合反応、高分子の化学反応、放射線高分子化学等の広い範囲にわたっている。高分子化学の誕生とはほぼ時を同じくして、当時空白であったこれらの分野の進展に大きく貢献したものである。その業績の中で特に顕著なものを挙げると、同名誉教授により提案された高分子溶液の粘性と分子量の間の一般的な関係式があげられよう。また高分子化合物の双極子能率の測定は世界に先がけて行なわれたものである。さらに高分子の生成反応の機構の解析、なかんずく共重合反応性比を決定する方法の確立は重要である。

以上に述べた独創的な研究は今日の高分子化学の礎をなすものであるが、同時に重要なことはこれらの基礎研究が巧みに応用面に結実したことであろう。その成果がビニロンであり、現在世界的にみて主要な合成繊維の一つに成長している。

このような研究上の功績をたたえて、昭和30年には日本学士院賞が授与され、また昭和31年に紫綬褒章が授けられ、また昭和42年には日本学士院会員に選出された。今般さらに文化勲章受章の榮譽を受けられたことは喜ばしいことである。

(工学部)

### <紹介>

#### 木材研究所

木材研究所の設立は、昭和19年である。

創立当時、本研究所は当初の構想に基づいて木材物理、木材化学、木材生物の3研究部門の内にそれぞれ物理3、化学3、生物2の計8研究室を設けて発足したが、その後斯学の発展に伴い、製紙、繊維板両試験研究室および製材木工、製紙、繊維板の3試験工場が増設された。しかし、この間従来の研究室制度では、学問の発展に応ずる総

合的な機能に欠けることが痛感されてきたので、昭和38年に木質材料研究部門が増設されたのを機に、木材物理、木材化学、木材生物、木質材料の4研究部門制に統合された。その後昭和42年、新たにリグニン化学研究部門が設置され、あわせて5研究部門となり、さらに昭和49年には樹木形成研究用ファイトトロンを設置をみた。

木材資源の将来は、いかにそれが再生産可能な資源であるとはいえ楽観を許さないものがあり、その量的増産、質的向上、利用の合理化、劣化防止等々木材研究の直面する問題は多岐にわたって

いる。本研究所はこれらの問題について基礎的・応用的研究を行なっている。

現在の各研究部門における主要な研究項目を挙げると次のとおりである。

木材物理部門では、木材の物性、木造空間の特性、木材の固有応力、材質 (wood quality) の形成と樹木の生長との関連など。

木材化学部門では、ヘミセルロースの構造と樹木中における機能との関連、リグニン・炭水化物結合体の構造、樹木中におけるセルロースの高次組織とその機能、パルプ廃液中の多糖成分ならびにリグニン成分の利用、木材のパルプ化と製紙など。

木材生物部門では、木材組織研究分野として木部組織の形成と環境、生長調整物質、育林技術との関連、木部細胞壁の形成と細胞小器官との関連、古材の樹種鑑定およびその考古学的応用など。また、生物劣化研究分野として木材の腐朽機

構、シロアリの生理活性物質、海虫による木材の食害、木材防腐防虫剤の開発および処理法など。

木質材料部門では、新しい木質材料の開発、木質材料の難燃化、木質材料および木質接着の耐候耐久性、木材接着の破壊力学、木質平面材料および合板シエルの力学的性質、木質材料の居住特性など。

リグニン化学部門では、リグニンの化学構造と反応性、リグニンの生合成と進化、木材形成の生化学、リグニン関連物質の化学と生化学、微生物によるリグニンおよびリグニン関連物質の分解機構、リグニンの化学的生化学的利用、木材抽出成分の化学植物分類および利用など。

なお、本研究所は機関誌として WOOD RESEARCH (英文誌) と木材研究資料 (邦文誌) を持ち、前者は年2回、後者は年1回発行して研究の成果を公表している。 (木材研究所)

### 学 術 講 演 会 の 開 催

本学では、学術講演会を下記のとおり開催いたします。本学教職員、学生の来聴を歓迎します。

記

講 師	吉川幸次郎 (京都大学名誉教授)	日 時	昭和52年11月29日 (火) 午後2時
演 題	極東文学の価値	場 所	法経第四教室

— 学 生 部 —

### 日 誌

(1977年10月1日～10月31日)

- |        |  |                                       |  |
|--------|--|---------------------------------------|--|
| 10月1日  | 霊長類研究所創立10周年記念式  | 学・海洋科学担当次官補 John Brooks Slaughter 氏来学 |  |
| "      | フランス国 OECD 労働力社会問題経済局長 J. R. Gass 氏来学  | 18日                                   | マレーシア国理科大学副学長 Tan Sri Haji Hamban Sheikh Tahir 氏来学 |
| 4日     | ドイツ連邦共和国アレキサンダー・フォン・フンボルト財団総裁フェオドール・リネン氏来学   | 19日                                   | 同和問題委員会  |
| "      |  | "                                     | 国際交流委員会  |
| 7日     | インドネシア国教育文化省高等教育総局長 D.A. Tisna Amidjaja 氏, ランボン大学学長 Sitanala Arsjad 氏およびサムラトランギ大学学長 J. W. Waworontoe 氏来学 | 20日                                   | 医学部解剖体祭  |
| "      | フランス国全国青年スポーツ文化連盟事務局長 R. Pringarbes 氏来学  | "                                     | イタリア国外務省文化交流局長Montezemolo 氏来学                      |
| 11日    | 評議会  | 21日                                   | 連合王国エクゼター大学教育学部長 Richard D'Aeth 氏来学                |
| 14～15日 | ソビエト連邦科学アカデミー高温研究所メディン・アレクサンドロヴィッチ氏およびシェルコフ・ミハイロヴィッチ氏原子エネルギー研究所を訪問                                       | 22日                                   | 名誉教授称号授与式  |
| 15日    | アメリカ合衆国国立科学財団天文・気象・地   | 24日                                   | オーストラリア国グリフィス大学学長 F. J. Willett 氏来学                |
|        |  | 26日                                   | タイ国バンコック日本人学校マネージャー コスム・ウィッカセム氏来学                  |
|        |  | 28日                                   | 連合王国文化センター代表 I. Fraser 氏来学                         |
|        |  | 29日                                   | 名誉教授懇談会  |